

# 岐路に立つ女子大学

## —大学案内と当事者の語りからみるリアリティー—

志水 宏吉<sup>1)</sup>・新谷龍太郎<sup>2)</sup>・岡邑 衛<sup>3)</sup>

### 要旨

本論文は、女子大学が急速な共学化・募集停止の波に直面する現在、その実態と現代的意義を教育社会学的観点から明らかにするものである。1948年の発足以降増加を続けた女子大学は、1998年の98校をピークに減少へ転じ、2024年には74校となった。本研究では女子大学の「生き残り戦略」に着目し、全国72校の大学案内分析と、11大学57名への聞き取り調査を実施した。その結果、大学の自己呈示には「革新型」「中道型」「保守型」の3類型が見られ、各大学は規模・立地・歴史などの制約のもとで異なる戦略を採用していた。インタビューでは、教員の肯定的意見が否定的意見を上回り、卒業生もまた女子大学の教育環境を高く評価していた。特に「女性が自分らしさを保ち、安心して学べる環境」が共通して強調された。本研究は、女子大学が高等教育の多様性を支える重要な学校種であることを示すとともに、女子大学の存続に向けた課題を提示するものである。

キーワード：女子大学、生き残り戦略、自己呈示、高等教育の多様性

### 目次：

- I. はじめに
- II. 大学案内にみる女子大学の「自己呈示」
  1. 分析枠組
  2. 分析結果—「自己呈示」の3類型
- III. 当事者の語りにもみる女子大学の生き残り戦略
  1. 調査の概要
  2. 事例校の概要
  3. 語りの分析
  4. まとめ
- IV. 女子大学の現代的意義
  1. 分析の概要
  2. 教員の意見分布
  3. 卒業生の意見分布
  4. まとめ

### 引用文献

1) 武庫川女子大学教育総合研究所・教授 2) 同志社女子大学現代社会学部・准教授 3) 甲南大学全学共通教育センター・准教授

## I. はじめに

本論文の目的は、教育社会学的観点から、岐路に立つ日本の女子大学の現在の姿と克服すべき課題を把握したうえで、その現代的意義について理論的検討を加えることにある。

日本の女子大学は、戦後の教育改革によって1948年に誕生した。その年は、新制高校が発足した年でもある。戦前の女子専門学校を母体とする5校（津田塾大・東京女子大・日本女子大・聖心女子大・神戸女学院大）を皮切りに、翌1949年には女子高等師範学校を前身とするお茶の水女子大と奈良女子大という2校の国立大を含む30校が開校した。以後、女子大学の数は増加し続け、1998年にはピークとなる98校に達する。しかしそれ以降は、減少傾向に転じている。2023年度では74校であり、コロナ禍以降現在にいたるまで、続々と女子大学の募集停止（恵泉女学園大学、神戸海星女子学院大学、京都ノートルダム女子大学など）、あるいは共学大学への移行（2025年から：名古屋女子大学→名古屋葵大学など、2026年から：女子栄養大学→日本栄養大学など、2027年から：武庫川女子大学→武庫川大学など）が発表されており、その傾向に拍車がかかっている。

このように、今、女子大学は岐路に立っている。

女子大学研究の第一人者である安東は、以下のように指摘する。

*「女子学生の志向、社会からの要請、大学規模や財政状況といった現実的な要因と、創設の使命・女子大学としての理念・女子教育の目的などの理念的要因の間で、生き残り戦略の模索が続くことになる。」（安東2022、43頁）*

冒頭に掲げた研究目的を達成するために、本研究では各女子大学の「生き残り戦略」に着目し、2024年度から現在にかけて、①全国女子大学の大学案内の収集と質的分析、②賛同を得た女子大学（全国で11校）における聞き取り調査（教員、卒業生、在校生、トータルで57名）の実施、という作業を行った。本稿では、それらの作業にもとづいて収集されたデータの分析結果を提示する。

本論文の構成は次のとおりである。II節では、2024年度に収集した大学案内72冊の分析から、女子大学が自身をどのように表象しているのかを3つの類型に整理する。III節では、女子大学の教員や在学生、卒業生への聞き取りデータを素材として、2節の分析で浮かび上がってきた女子大学の3類型に対応する3大学の事例を紹介する。IV節では、本稿のまとめとして、「女子大学の現代的意義」について、教員および卒業生の語りをもとにした整理を試みる。なお、女子大学について、当事者の用いる「女子大」の表現を用いている箇所もある。

## II. 大学案内にみる女子大学の「自己呈示」

### 1. 分析枠組

本論文では、安東・鎮（2008）が「女子大学の自己像」として、2004年度に収集した大学案内や自己点検・評価報告書を分析した論文との比較を行っている。同論文では、大学案内を「構成（頁数・体裁）」「キャッチコピー」「資格・就職」「女子大学の意義の記載有無」に着目して分析しており、当時87校ある女子大学の中から入手した80校分の大学案内を分析している。本論文でもこの枠組みに沿って、収集した大学案内を分析する。2024年の調査開始時点で存在していた74校の女子大学の中から、すでに募集停止を発表していた2校（恵泉女学園大学、神戸海星女子学院大学）を除く72校分の大学案内を、2024年8月に全国の女子大学のホームページなどを通じて収集した。その中には、2025年度に共学化することを発表している5校（神戸松蔭女子学院大学、園田学園女子大

学、東京家政学院大学、清泉女学院大学、名古屋女子大学)も含まれている。

なお、大学案内で表現されているものは各大学がアピールしたいポジティブな姿であることから、本発表では「自己像」という言葉に代えて、「社会的に望ましいイメージを他者に与えるための印象操作」という意味を持つ「自己呈示」(ゴフマン訳書 2023)という視点から分析を試みる。パーセントの表記は小数点以下を四捨五入した数値である。

## 2. 分析結果—「自己呈示」の3類型—

詳細については、武庫川女子大学教育総合研究所研究レポート第55号「女子大の自己呈示—大学パンフレットの質の分析から」(志水・新谷・岡邑・金南 2024、19-55頁)に掲載しているため、ここでは主要な知見のみ確認しておく。

- 全体的な特徴として、平均頁数が増えており、「学ぶ環境」から「そこで学ぶ主体としての学生」をアピールするようになった。
- キャッチコピーについては、2004年は「自分・私」という言葉が多く見られたが、2024年では「学ぶ/成長」「世界」など、大学が世界や社会で活躍する女性を育む場であることをアピールする大学が増えた。
- 進路や就職については、卒業生の「物語」に紙幅を割く大学案内が見られるようになった。
- 2004年調査と比べて、より女子大学としての意義を強調する大学の割合が増えた。

学長メッセージやキャッチコピーなどで用いられている表現から女子大学の意義を分類すると、次のような3つの類型を想定することができる。

一つは、女性リーダーや女子大学の革新を訴える「革新型」である。常に時代に先駆けて改革を行い、ジェンダー平等や女性リーダー、グローバル人材を育てることへの使命感や、女子大学そのものを革新しようとする姿勢が見られる大学である。キャッチコピーとしては、「変わる、を変えない」「グローバル女性リーダーが未来をひらく」など、率先して社会を変革する主体として女性を位置付けている点に特徴がある。

次に、時代に合わせて改善を図る「中道型」である。時代に合わせて自大学に求められる改善を堅調に行なっており、女子大学として安心できる学習環境やキャリア支援をアピールする女子大学である。「革新型」ほど積極的な社会変革を目指すメッセージは見られないが、「変化」する社会に対応し、その要請に応じて女性に求められる「力」を身につけられる場、として自己呈示している点に特徴がある。

最後は、「女性らしさ」や「自分らしさ」など従来からのアピール要素が濃い「保守型」である。「良妻賢母」という言葉を用いる大学はほとんど見られなくなったものの、「たおやかさ」「やさしさ」など、従来から「女性」と紐づけられやすいイメージが打ち出されていたり、「自分らしさ」という、2004年度調査で多く見られた「自己像」が依然としてアピールされている女子大学である。また、ジェンダーについて積極的な言及が見られなかったり、保育士や栄養士など従来の子女子大学で養成されてきた特定のキャリアが主軸となっている点、地域のローカルなニーズに応えるなど卒業後の射程が「革新型」や「中道型」に比べて限定されている点などに特徴がある。

ただし、この3つの類型は、実際にはそれぞれの要素を含みながらグラデーションを持っており、女子大学のリアリティーは単一ではなく多様性を持つものであると捉えることができる。そこで、次

節からは、それぞれの類型に分類される女子大学がどのように現状を捉え、対応しようとしているのかを見ていくことにする。

表1 女子大学の意義に関するキーワードに基づく3類型

類型	キーワード	キャッチコピー・学長メッセージ
革新型	女子大学全体への言及と革新 (変革・ジェンダー平等・女性 リーダー・グローバル人材)	「 <u>変わる、を変えない</u> 」「 <u>グローバル女性リーダーが未来をひらく。</u> 」「 <u>変革を先駆ける</u> 」「 <u>変革を担う、女性であること</u> 」「 <u>凛としてほがらかに、輝ける女性リーダーへ</u> 」
中道型	時代に合わせた女子大学の改善 (変化・働く・キャリア支援)	「 <u>愛、知性</u> 」「 <u>しなやかに、切り拓け。進化し続ける</u> 」「 <u>変化する時代に揺るぎない強さを持つ</u> 」「 <u>自由になる力を。社会を照らす光を。</u> 」「 <u>生涯にわたって「学び働き続けることのできる女性」が求められている。</u> 」
保守型	従来の子女子大学に求められた 価値(女性らしさ・自分らしさ・ 特定の職業)	「 <u>「あなた」が理想とする女性を自ら育ててください。</u> 」「 <u>凛として「たおやか」な女性をこの限りある時間の中で育てるのはあなた自身です。</u> 」「 <u>私の好きを探せる大学</u> 」「 <u>自分らしさ</u> 」「 <u>ひとりひとり、花、咲かせよう、うつくしく、やさしく、しなやか、愛、世界</u> 」

### III. 当事者の語りにみる女子大学の生き残り戦略

本パートでは、大学案内分析によって浮かび上がった、女子大学の自己呈示による3つの類型ごとに教員、在学生、卒業生に実施したインタビューの分析結果を示す。主に、女子大学が「岐路に立っている」ことについての認識と対応、女子大学での経験の特徴を描くことで、今日の日本における女子大学のリアリティーの一端を明らかにしたい。

#### 1. 調査の概要

##### (1) 調査および分析の方法

本調査は、国内の女子大学に勤務する文科系研究者のうち、調査実施者らにつながりのある研究者を縁故法によりリクルートし、また、女子大学の学生や卒業生については、それら研究者からの紹介を依頼し、機縁法によりリクルートして、基本的に対面にてインタビューを実施したものである。1人のインタビュー対象者に対し、基本的に1～2名の調査実施者がプライバシーの保たれる個室等で半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容はICレコーダーに録音したものを文字起こし、質問テーマごとに語りを分類し、共通する語りの要素を抽出、内容ごとに分類したものを複数の研究者で検討し、分析した。なお、調査時期は2024年～2025年である。

##### (2) 調査対象者

11の国立、私立の女子大学(内1校は既に共学化)において、教員23名、在学生19名、卒業生15名の合計57名にインタビューを実施した。本稿では、3つの類型ごとに1校ずつを対象校として選択して分析を実施した。インタビュー対象者は以下の通りである(表2)。ただし、Iさんについては、都合により文書による質問への回答を分析の対象としている。

表2 インタビュー対象者一覧

	教員				在学生		卒業生	
	性別	年齢	勤務年数	学年		年齢		
A大学 革新型	A先生	男性	50代	12年目	Cさん	修士2年生	Eさん	30代
	B先生	男性	40代	4年目	Dさん	学部4年生	Fさん	20代
B大学 中道型	G先生	女性	60代	11年目	Iさん	学部3年生	Kさん	30代
	H先生	女性	50代	13年目	Jさん	学部3年生	Lさん	30代
C大学 保守型	M先生	女性	30代	3年目	Pさん	学部4年生	Qさん	20代
	N先生	男性	50代	26年目			Rさん	20代
	O先生	女性	50代	8年目				

※勤務年数等はインタビュー当時のものである

### (3) 研究倫理

本調査は、武庫川女子大学教育総合研究所倫理委員会による倫理審査を受けて実施したものであり、研究参加者へは研究説明書に基づいた説明をし、同意を得て実施したものである。

## 2. 事例校のプロフィール

### (1) A大学（革新型）

首都圏に位置するA大学は、学生数6,000名を超える規模で、多様な学部学科をもつ私立の総合大学である。一般入試受験者数も多く、定員を充足している。偏差値は60前後（ベネッセ調べ。以下同様）である。地の利を生かした経営をしており、大学教育以外の複数の収入源を持つことで、経営的にも盤石である。

A大学では女性のエンパワメントを明確に打ち出し、関連する講座を全学生が受講することが義務付けられている。国際交流やプロジェクトへの参画、リーダーシップ育成を重視しており、国際的に活躍できるリーダー育成を目指しているといえる。また、就職支援が充実しており、就職後のケアも手厚い。有名一般企業や公務員を含めた就職率の高さは、大学の主なアピールポイントの一つである。

### (2) B大学（中道型）

地方の政令指定都市に位置するB大学は学生数3,000名程度の私立大学である。複数の学部学科があるが、一般的に共学大学で女性の比率が高い学部学科が揃っていることが特徴である。過去には定員割れを経験し、学部再編等により定員充足率が一旦は回復したものの、この5年で再び低下傾向にあり、近年の充足率は1.0をやや下回っている。設立時より宗教的背景を維持し、長い歴史を有する伝統校でもある。宗教的価値観を前面に押し出し、ジェンダーの多様性についても寛容な立場を表明している。一方、限定的ではあるが学部の再編や新しい学科の新設などの改革にも取り組んでおり、伝統を重んじつつも、改革に取り組む大学といえる。

### (3) C大学（保守型）

県庁所在地の地方中核市に位置するC大学は学生数250名程度の私立大学である。近年、入学者数が漸減傾向にあり、募集定員を減らしてはいるものの、それでも定員充足率は6割程度である。偏差値は40前後である。また、この地域で唯一の女子大学として長い歴史を有する、短期大学ベースで発展してきた伝統校である。とくに地域社会の保育や栄養など、地域のニーズに応じて女性の割合

が高い職場で活躍する人材を輩出しており、高い就職率を誇る、資格取得を重視する大学である。

### 3. 語りの分析

#### (1) 教員の語り①—「女子大学は岐路に立っている」という認識—

各大学は上述の通り、大学の規模、立地、学生の偏差値帯、定員充足率など、様々な面において異なっている。しかしながら、その危機感の程度や捉え方は微妙に違いがあるものの、以下の語りに見るように各大学の教員は異口同音に「女子大学は岐路に立っている」という認識を示した。

A先生：（女子大学の現状は）残念ですね。オープンキャンパスで、いつも学科長として、最後の一言。「女子大はいらないか」ということで。「いるよ」に決まっている。で、保護者にも女子学生にも、「君たちが生きてきた小中中は、男女平等は建前でしかないです。社会に一步出れば、多分、保護者たちは分かりますけれども、すごい差がある。いまだに女子だけ一般職、総合職。男子はそういう悩みはありません。それすら疑問に思わない君たちがおかしい、と思わないのがおかしい」ということをいつも言ったりしますけれども。

H先生：いろいろな考え方があると思うんですけど、どんどん減ってきて女子大がこれからつぶれていく方向だというふうな言説が基本ですから。それは当然そうだと思いますけど、それとまた別の視点として、それでもこの程度で済んでいるというのは、ぜひ（女子大学は）必要なだろうなという考えはあります。両方を思いますね。

O先生：やっぱり女子大学がどんどんなくなっていってしまっているので、寂しいな、というのが正直なところです。私はやっぱり昭和〇年生まれなので、女子大がたくさんまだあった時代で、自分自身も〇〇大学という県立のもう今統合されてるんですけど、その出身だったのもあって、（女子大学が）無くなっていくんだな、というのがただ寂しさの一方で、だからといって何かがついていうこともなく役割を果たしていたんじゃないかなというのを、これだけ女子も男子もそれほど関係なくたくさん学べる環境になっているので、女子大の役割というのはもう必要ないぐらい、いい世の中になったのかな、というふうにも感じています。

以上、どの分類の大学の教員も、女子大学が「岐路に立っている」という認識を持つてはいるが、その危機感には微妙な違いが見られる。革新型のA大学では、定員を満たしてはいるものの、A先生はオープンキャンパスの段階から、入学希望の高校生に女子大学の必要性を訴えており、またB先生は「学内でも常々女子大のおかれる環境は厳しい。厳しいってずっと。大学で危機感を共有」していると語っている。一方で、保守型のC大学のO先生は、女子大学の役割が終わり、「いい世の中になった」という認識を示し、またM先生も学生定員を満たしてはいるが、学科によっては入学者数が堅調であることから、危機感はその高くはないということを確認している。

#### (2) 教員の語り②—それぞれの生き残り戦略—

危機感の程度に差はあるものの、共通して「女子大学は岐路に立っている」という認識を各女子大学の教員が共有していることが確認できた。しかし、それぞれの大学において、どのような生き残り戦略を採用しているのかということに関して、大学毎に違いが見られた。

まず、定員を充足している A 大学ではあるが、大学存続の危機感は強い。女子大学としての生き残りをかけて、A 大学は変化をアピールし続けている。B 先生は以下のように語った。

B 先生：大学全体としては、毎年何か受験生にとってニュースになるような出来事を（発信している）。要するに話題にのぼって、「あ、A 大学ってあるんだね」っていうのが多分まず大事だと思うんですよね。女子大を考えている高校生でいったときに、A 大学ってまず名前を知っていただくためには、毎年なんか「新学部ができます」とか、「新しいプログラムが始まります」とか、そういうことをやっているっていうのは全学的な雰囲気としてあって、来年度もちょうど新しい学部を作るっていうのをやっていますし。今年度の 1 年生なんかに向けては、学科を改組してとっているのをやっているの、毎年何かしらそういう学びの分野を広げるだとか、今日的な内容に合わせて再編するとか、そういうのをやっているのが今の大学の現状かな。（中略）興味持たれなくなっちゃうと、落ちていくのがもう早いっていうような危機感が恐らくあって、それこそ自転車で言うところの「こぎ続けなければいけない」っていうような感じなんだと思います。

女子大学を視野に入れている高校生に向けて、目新しさ（ニュース）を常に発信し続け、変化を見せ続けることが重要なのだという。大学が林立する首都圏の大学における学生獲得競争の激しさを物語っている。そして以下の語りを見るように、競合相手は女子大学ではないという。

A 先生：今、うちはもう女子大は見えていません。（中略）〇〇大学は少人数ゼミを訴えているので。結構、共学だけでも女子大っぽいことやってる。少人数授業。それは、だから、ライバル。

B 先生：大学としては女子大のみと競争しているわけではなくて、本学の強みって割と募集停止に至ってる女子大さんとの違いって、分野が多様だっていうことがあると思うんですよね。割と単科に近い大学さんだったりすると、短大さん苦勞されているので、そういった意味では本学は、まあ理系は弱いんですけど、総合大学なので、他の共学の総合大学の同じ分野の学科さんとのそれぞれの競合があるっていうのが状況としてあって。

A 先生：（他の女子大学が）眼中にないというか、お互い協力し合おうというポジションかな。なんか、ね。パイが減る中でお互い競争し合っても、あんまり意味ない。

A 大学にとって競合相手は共学の総合大学である。特に少人数教育という「女子大っぽい」ことをアピールする共学大学がライバルであるという認識が持たれていることから、女子大学であることが 1 つの「売り」となっていることもわかる。さらに、A 先生は「岐路に立つ」女子大学同士が競争ではなく協力することが必要だという認識を示した。女子大学の良さや必要性を訴え、変化をアピールし続けることで、A 大学は生き残りを図っているといえる。

また、大学が変化し続けると同時に、学生にも変化を求めているのが A 大学の一つの特徴である。

A 先生：それで私、いつもオープンキャンパスで言っているように、「偏差値よりも変化値」。もう、どう変わるのか、この 4 年間。別に男を敵に回してやるんじゃないで、対等。あなたはあなた

だから。女子とか男子、関係ないっていうことは、でもね、やっぱり難しいんだよね。変わった学生は、感覚的に2割ぐらいしかいない。8割は、例えば、私のゼミ生もそうだけでも、授業で批判的な目で見ている女子マネも、一生懸命やっているし。で、反応してくるんで。「先生、この男性社会、先生が言う男性社会、生き抜くためには、女子マネで頑張ることは何が悪いですか」みたいな。いい男をゲットするのは、それは私の人生の戦略。「あ、なるほどな。偉い。えー、じゃ、いい男、捕まえた？」「捕まえた」って言うんだよね。

学生に求めるのは「偏差値よりも変化値」なのだという。大学4年間で、どれだけ変化できたのか。特に、ジェンダー意識の変化を学生に求めていることがわかる。この背景には、上述の語りにあるように「男女平等は建前でしかない」日本社会の現状に疑問を持てるようになることが重要であり、そこに「岐路に立つ」女子大学の存在意義を見出しているA大学の教員の認識がある。

次にB大学についてである。新型コロナウイルスの流行や少子化の影響を受け、入学者の増減を繰り返してきたB大学は、近年、若干の定員割れが生じてはいるが、ほぼ定員近くの入学者を確保できている。そのため、学科のコンセプトを変更するなどの変更は行っているが、目立って大きな改革を行っているわけではない。この点について、H先生は以下のように語る。

H先生：経営方針っていうことでは、ほぼ私に分かることはないですね。(中略) もともとある、何ていうんですかね、ネームバリューとか。(中略) もともとあるものをどう汚さないかっていうところだけに結局留まってる印象ですね。

「もともとあるもの」の一つには、古くから女性の教育を担ってきたB大学の「歴史の強み」(G先生)と、以下の語りに見られる質の高い教育である。

G先生：教育の特徴で、専門性に裏打ちされた、少人数の丁寧な、まあ、ゼミナールとかですね、学科ごとの丁寧な教育がなされているので、入るときの偏差値以上に伸びる学生が多いっていうのが私の印象です。

H先生：先ほどちょっと申し上げた、学生一人一人を見るっていうことに、非常に、全員野球的に教員が自覚的だなというところですね。自分は「学生嫌いなんで」っていう人あんまりいないと思うんですね。(中略) 基本みんなそうやってるから、自分もそうしようっていうふうに、ゼミも、学生との、いたずらに距離をなあなあで近づけるっていうよりも、学生一人一人の学びの進度を教員が把握して、みたいなことが多分、本当にすごいなって思いますね。そこが一番大きいですかね。

「専門性に裏打ちされた少人数の丁寧な教育」「全員野球的な教育」という教育の質の高さに、これまで他大学でも経験を重ねてきた両先生は自負を持っていることがわかる。大きな改革こそないものの、愚直に質の高い教育を実施し続けていることで、女子大学の危機を乗り越えようとしていると考えられる。

また同時に、B大学はジェンダーの多様性についての発信を行うなど、ジェンダー平等に積極的な女子大学でもある。「全学生が初年次教育でウィメンズスタディーズとか、ジェンダーイシューって

いうのを、丁寧に学ぶ」(G先生) ことからそのことはうかがえる。女子大学の意義を、H先生、G先生はそれぞれの角度から以下のように強調する。

H先生：女子大っていうのは別に好きで作ったもの、枠組みじゃないので、日本も。日本にこれが存在するのは、作りたくて作ったっていうよりも、これ(女子大学という枠組み)がないと、もともと女子教育が成立しなかったから存在したものなのかもしれない。(中略) 逆に言うと、そんなもの(女子大学という枠組み)がまだ必要な日本だということってあると思いますので、現代的な意義っていうのは、日本がまだジェンダー平等が全然成立することの意義さえも知らない国民性であるっていうことを、自覚するための数少ない最後の枠組みかなと思っています。

G先生：われわれは幸い、隠れたカリキュラム研究の知見を知ってますから、共学にしたら全部ジェンダー平等って、それ、世の中、甘くないこと、重々知っておるわけですね。ただ、むしろ、本学のような所がですね、地域拠点になって、ジェンダー平等ってほんとは何って、何が地域社会の変革に必要なのかを提示するぐらいの意気込みが欲しい。

地域社会、日本社会のジェンダー意識の低さに危機感を持って、そこに女子大学が果たす役割を指摘する語りである。そのような意識をもった教員らが、学生に向き合い、質の高い教育を提供し続けることで、岐路に立つ女子大学のプレゼンスを維持しているということができるだろう。

最後に、C大学についてである。C大学は定員充足率が高くはないものの、教員の語りからはそれほど強い危機感が示されることはなく、変化への対応も緩やかである。以下は、その背景についてのM先生の語りである。

M先生：幼稚園の先生、保育士になりたい4年制志望の子は、学力があれば〇〇大学(近隣の国立大学)の教育学部を受けます。その滑り止めでうちを受けてくれるって感じです。なので、(学生間で)なんかすごい偏差値差があるんです。まあ、あまりいないんですけど、教育学部を落ちてうちに来たとしたら、何て言ったらいいんですかね、国立からFランみたいな。Fランっていわないですけど。(中略) 他(の私立大学)に幼稚園のところ(免許状)を取れるのがないので、そういう意味では(C大学に)来やすい。

インタビュアー：競い合ってるというよりは、共存共栄というか、棲み分けというか。

M先生：そうですね。

M先生の語りからは、C大学は2つの側面における「棲み分け」を行っていることがわかる。国立大学の「2番手校」として、学力面での「棲み分け」を、一方、近隣の私立大学とは教育面(教育内容や取得できる資格)での「棲み分け」を図っている。このように、近隣の大学との「棲み分け」を行うことで、他大学との競合ではなく、共存しているのだと考えられる。

一方で、近年、デジタル人材の育成への県の補助金を近隣の大きな大学2つとともにC大学も獲得し、学部内に専攻を1つ増設している。しかしながら、学部を増設するという大きな変革を行った他の2大学と比較して、C大学は専攻の増設という限定的な変革に留まり、結果的に入学者定員を充足できずに「すごい厳しい現状」(N先生)にある。このことについて、N先生は以下のように語る。

N先生：近隣に〇〇大学さんと、△△大学っていうのがありまして、そのどちらも、結局同じような、デジタル人材育成の、もうそっちはおっきいので、学部を二つともつくって（中略）やっぱ大きな大学はそういう情報学部とかね、△△大学も、自然のフィールドワークみたいなことと、デジタルをうまく掛け合わせてすごく、魅力的な。今でこそ、今、はやりの環境問題とか、そういうものを考えさせられるような学部をつくっているの、ちょっとこれは（太刀打ちできない）。

以上、C大学は近隣の大学と学方面、教育面での「棲み分け」を行うことで、大学の維持を図っている。また、近年、補助金獲得のために新たな専攻を作ったものの、その改革規模は限定的で、結果的に定員を充足するには至っていない厳しい状況が続いている。他大学と競合せずに、共存していく道を探り続けるということが現実的な生き残り戦略となっていると考えられる。

### （3）学生、卒業生の語り①—「自分らしさ」を発揮できる場としての女子大学—

各大学は、先述の通り、大学の規模、立地、学生の偏差値帯、定員充足率等もそれぞれである。しかしながら、それぞれの大学の学生や卒業生の女子大学での学生生活についての語りから見てきたことは、違いよりも、女子大学という1点の共通点を基盤とした、女子大学の意義に関するいくつかの共通の認識であった。

3つの大学の学生、卒業生の多くの語りの中に、女子大学では男性の目を気にせずに「自分らしさ」が発揮できる、という共通点を見出すことができる。「男性を気にせず、自分たちのやりたいように全部動いて、周りの目を気にせずに動けるっていうのは女子大ならではのかな」と語ったFさんは、女子大学での経験が卒業後にも生きているという。以下は、このことに関するFさんの語りである。

Fさん：今、営業に移って、「1年間は見えてね」みたいな感じで一緒に動いたりしてたんですけども、これからお客さんにうちの会社を見てもらうためにどうしたらいいのとか、新規でお客さん、どこから引っ張ってくるみたいな話を上司に言われたときに、「私はこう思うんですけど、どうですかね」っていうのを突っ込めるといって、おどおどせずに言えるっていうのはあるのかなって。（中略）卒業後の動き方、動き方というか、働き方もそうだと思いますけど、自分の意思で動ける。人の言いなりにならず、自分はこうだけ、どうよっていうのを言っていける感じは大きいかなと。

また、「男性と関わるのが苦手」な女性が高等教育を受ける場を確保する必要性についての指摘も複数見出された。このことに関するLさんの語りである。

Lさん：私の、学生のときの友人で、学科は違う学科の子だったんですけど、「男性と関わるのが苦手だ」っておっしゃってる子もいたんですね。ってなったときに、勉強はしたいけど、でも共学だとそういった状況で、ちょっと大学に行くことをためらってしまうような子もいるのかなと思って。そうなったときの受け皿になるのは、女子大のかな。

「男性と関わるのが苦手」という表現について、日本ではジェンダーギャップがいまだに大きいことを踏まえると、これは得手不得手という個人の問題と捉えるのは不適切であろう。しかし、その

ような社会だからこそ、女子大学で「男性を気にせず」に、「自分の意思で動く」経験は卒業後も生かされ、また、そのような女性にとっては、女子大学は高等教育機関における「受け皿」としての役割も果たしているといえる。これらのことから、女子大学の学生や卒業生は、女子大学を「自分らしさ」を発揮できる場として捉えていることがわかる。

#### (4) 学生、卒業生の語り②—リーダーシップを育成する場としての女子大学—

社会ではさまざまな役割がジェンダー化されているが、女性だけの大学生活では、当然ながら全ての役割を女性が担うことになる。この経験を通して生じる意識や行動の変容についての語りが複数見られた。ここではとくにリーダーシップについてのPさんとLさんの語りを取り上げる。

Pさん：サークル活動でもやっぱり高校の時は委員長や生徒会長で男性としてイメージもあったし、実際にそうだったんですけど、やっぱり女子大だと女の子しかいないからサークルの会長や部長も必然的に女の子になってくるので、私もリーダー的な役割を担わせてもらうことがあったので、共学だったらやらなかった立ち位置かなと思いました。(中略) 全体的に何もかも、それこそ生徒会とか学級委員とかもやってはいたけど、やっぱり委員長とか生徒会長とか男の子に任せちゃう部分はあったりして、あんまり自ら主体的に発言するタイプではなかったんですけど、でもやっぱり自分が発言していい立場なんだっていう意識も、「(男子が) やってくれるからいいやみたいな、私がここで出しゃばるなものな」みたいなのがあったのが、なくなったかなと思うんです。

女子大学でのリーダー的な役割の経験を通して、それまであまり「主体的に発言するタイプではなかった」というFさんの意識や行動に変容が生じていることがわかる。以下の語りは、そのようにして身につけたリーダーシップは卒業後も生かされていると感じているLさんの語りである。

Lさん：個人的にリーダーシップというものを大学の4年間で得られた気がして。すごいリーダーをやったわけではないんですけど、先ほどお伝えしたクリスマスマーケットの運営とかも中心でやらせていただいたので、そういったところで結構リーダーシップっていうものを、すごく身につけられたなと私は思っています。今、実際、職場でプロジェクトのリーダーやらせてもらっています。本当に何年もたった今ですけども、大学でそういう得られたことを、生かしているのかなとは感じています。

#### (5) 学生、卒業生の語り③—女性のキャリアに関する意識—

3つの大学の学生、卒業生の語りの中にはいくつかの相違点も確認することができた。そのうちのひとつが女性のキャリアに関する意識についてである。一般職としてEさんが勤める企業では「一般職はもうほぼ99パーセント、女子大出身」なのだという。他の企業では一般職と総合職との壁をなくす取り組みも行われていると指摘したうえで、「同期でよく話しているのは、もし業績、悪くなったときに切れちゃうのは、一般職だね」という危機感を持っている。

そのような立場の弱さが語られる一般職から、総合職へと職種を変更したのはFさんである。Fさんが務める企業も、「一般職は女子大からしか採らない」方針を維持しており、Fさん自身ももともと「お茶くみの仕事をしたい」と考えていたが、総合職への転換をし、今後はキャリアアップを希望している。

また、勤務先での女性の立場の弱さ、性差別に直面している K さんは、大学で受講したジェンダー論の授業で影響を受けて、以下のような取り組みを行っている。

K さん：今の社会にある性差別とかに怒りを感じていて、これを次の世代には残さないぞ、みたいな気持ちがあるので。(中略) 自分で(副業として)ウェブで書店もやっていて、本屋。そこでフェミニズムの本とかを扱っているんですけど、なのでそういうふうな今の活動にもつながる。

このように A 大学 (E さん、F さん) や B 大学 (K さん) の卒業生は、一般職であることや、職場での女性の立場が弱いことについての問題点を語ったが、一方、C 大学の卒業生の語りにはそのような語りが見られなかった。

ただし、この相違点は、大学の類型の違いによるものというよりも、勤務先が女性が多数を占める職場かどうかや業種による違いと考えるほうが妥当だろう。革新型、中道型、保守型の間に明確な線引きをすることはできず、グラデーションがある。大学が革新型であるほど、大学の規模が大きく、学部学科の種類が豊富で、学生は男性が多い職場や業種に就職し、一方、保守型であるほど、大学の規模が小さく、保育や栄養などの女性の割合が高い職種に必要な資格と関連した学部学科を有し、学生は女性が多い職場や業種に就職する傾向があると考えられる。今回相違点として見いだされたキャリアに関する語りの違いは、女子大学の類型の裏側にある、これらの違いと関連しているのではないだろうか。

また、職場での女性の立場が弱いことについての問題を語った卒業生の中でも、企業内の固定的な性別役割や性差別に抗い、行動に移している卒業生と、問題は認識しつつも特に行動を起こしているわけではない卒業生が存在しており、さまざまである。しかし、前者の場合、その行動に関連する女子大学での経験について語っていたことが共通していた。ジェンダー格差が大きいとされる日本社会において、女子大学出身者が大学での経験をベースとして、企業内の固定的なジェンダー役割や性差別に抗いながらキャリアを形成している語りは、女子大学の意義を考えるうえでも重要だといえる。

#### 4. まとめ

本パートでは、女子大学の3つの類型ごとに、女子大学が岐路に立っていることについての教員の認識と大学の対応、在学生や卒業生の女子大学での経験の特徴を描くことで、今日の日本における女子大学のリアリティーの一端を明らかにすることを目指した。ここで明らかになったことは以下の通りである。

第一に、女子大学が「岐路に立っている」ことへの危機感は大学の類型によらず、教員に共有されていた。一方で、第二に、その対応の仕方、生き残り戦略には違いが見られた。革新型の A 大学は「変化をアピールし続ける」戦略を、中道型の B 大学は「大きな改革はないものの、愚直に教育の質を保ち続ける」戦略を、保守型の C 大学は「近隣大学との『棲み分け』を維持する」戦略が採用されていた。第三に学生や卒業生の語りからは、大学の類型に関係なく、女子大学で得られた多くの共通認識が示された。それらは、女性が自分らしさを保ち、活躍するという女子大学での経験に関係しており、この経験が卒業後にも生かされていると考えられた。

大学の類型の背後では、大学の規模、立地や歴史、学部学科の種類や学生の偏差値帯など、さまざまな要素が絡み合っている。共通するのは、女子大学が自分らしく、自立して活躍できる女性を育成しているという重要な役割を果たしながらも、女子大学が「岐路に立っている」という認識があるこ

とである。

生き残りをかけて、さまざまな改革を打ち出せるような条件が揃った革新型の大学はよいが、一方で、地方にある、女性が多くを占める専門職人材を育成するような小規模の大学、中でも学生の偏差値帯の低い大学、保育や栄養などの女性が多い職業の資格を取得することを主要な目的として掲げる学部学科を有する大学などは厳しい状況にある。そのような大学が今後進む道が、共学化や募集停止であるとするならば、分析で明らかになったような女子大学ならではの教育を享受できなくなる学生は、地方から出ることが難しい学生や学力が低い学生、保育や栄養などの専門資格の取得を目指す学生に偏ってしまうことが懸念される。自由競争による自然淘汰と考えることもできるかもしれないが、不利な状況に置かれた学生の学ぶ権利を確保するためにも、国や自治体による何らかの手立てが必要な時期が来ているのではないだろうか。

ただし、本調査の対象者となった教員は調査実施者らとのつながりがある文科系研究者であり、女子大学の教員を代表しているわけではないことや、学生、卒業生はそれらの研究者が連絡を取りやすい、比較的、向学校的な調査対象者であるため、過度な一般化はできないことに留意する必要がある。しかしながら、本調査分析は、岐路に立つ女子大学の関係者らによる語りから、そのリアリティーの一端を示すことができたと考えられる。

## IV. 女子大学の現代的意義

最後に、インタビュー対象となった女子大学関係者が、「女子大」あるいは「女子大での教育」について、自らの経験をもとにどのように考えているのかという問題を検討しておきたい。

### 1. 分析の概要

私たちの聞き取り調査の対象となったのは、11の女子大学に所属する教員23名、在校生19名、卒業生15名の計57名である。ここでは、分析作業として、第一に23名の教員の意見分布に検討を加える。そのうえで、15名の卒業生のデータを検討する。教員が指摘する事項との「重なり」や「隔たり」を検証するためである。「女子大学の現代的意義」を評価するにはまだタイミングが早いと思われる在校生については、今回分析を行なわなかった。

具体的な分析は、以下のような方針にしたがって行った。まず、それぞれの対象者の聞き取りトランスクリプトから、本テーマに関連があると思われるステートメント（1～2段落ほどの、ひとまとまりの言葉）を抽出する。次に、その内容の重なりを見るために、KJ法によってそれらのカテゴリー化を図る。そして最後に、浮かび上がってきたカテゴリーに適切だと思われるラベルをつける。

### 2. 教員の意見分布

#### (1) 全体の傾向

23名の教員の意見分布を整理したものが表3である。全体で60個のステートメントが抽出された。一人の聞き取りデータから、内容的には別のものと考えられるステートメントを個別に抽出したため、多くの教員のデータから、複数のステートメントが抜き出されることとなった。ちなみに一人当たりの抽出量は、1～4個におよぶ。

全体をみると、60のステートメントのうち、肯定的なものが40、否定的なものが20であった。2対1の割合で、肯定的な見解のほうが多いという結果である。

肯定的な意見は、〈女子大ならではの文化・価値〉、〈選択肢の一つとして〉、〈女子大だから来

たという学生の存在>、<女子だけで学べる環境>、<女性のエンパワメント>という5つのカテゴリーに分類することができた。また、否定的な意見の方は、<歴史的使命は終わった>、<男子にも門戸開放を>、<男女をどう分ける？>、<女子大でなくても>、<積極的意義が見出せない>という、これも5つのカテゴリーを設定することができた。多様な意見が見出されたが、全体としては女子大学の意義をうたうものが支配的であった。

表3 女子大学の教育に対する教員の評価

肯定的な意見		否定的な意見	
①<女子大ならではの文化・価値>	4	①<歴史的使命は終わった>	5
②<選択肢の一つとして>	6	②<男子にも門戸開放を>	3
③<女子大だから来たという学生の存在>	8	③<男女をどう分ける？>	3
④<女子だけで学べる環境>	11	④<女子大でなくても>	4
⑤<女性のエンパワメント>	7	⑤<積極的意義が見出せない>	5
⑥<その他>	4		
	合計 40		合計 20

以下で、その内容について掘り下げていこう。

## (2) 肯定的な意見

表に示されているように、肯定的な意見は5つのカテゴリーに大別して把握することができる。第一のものは、<女子大ならではの文化・価値> (①) を打ち出す意見である。

### B先生：女子大ならではの文化・価値

でも、均質化させればいいんだっていうわけではない。能力形成主義でやっちゃうと、能力さえできれば、環境はどこだっていいじゃないかってなるんですよ。だけど、何だろうな、やっぱり女子大ならではの文化ってどこに出るんですかね。わかんないんですけども、共学ではやっぱり置き換えられない文化っていうのはどこもある気がするんですね。で、性急に何々力を育ててるのかという話になると・・・。女子教育の中で、僕は能力じゃなくて価値だっていうふうに思ってるほうなんですけれども。つまり、女子学生を集めて、なんというんですかね、やっぱり女子、女性のことを考えるというか。うちはグローバル女性リーダーっていうことでやってるんですけども、それって中身を見ると能力になっちゃってるんですね。

### S先生：建学の精神にしたがって

共学化は難しいですね。前の理事長が、共学化に対してもものすごく反対する立場の人で、どこの大学が共学化するってなったときに、建学の精神を忘れたような大学はどうせもちませんよみたいな感じのことを言っておられた。あくまでも建学の精神にしたがって、私たちは女子教育をやるんだってということ言ってる。それは、素晴らしいなっていうふうに思ったんですけども。

B先生は、学力が高い層の学生が集まる伝統ある女子大学の教員である。「共学では置き換えられない文化がある」という発言には、先生の強い自負が感じられる。同様に、これも伝統ある女子大学に勤務するS先生は、「建学の精神にしたがって、女子教育をやる」という学長の発言に共感を示し

ている。このように、「独自の文化・価値」を押し出す意見は、いわゆる名門女子大学の教員たちに見られる傾向があった。

第二の категорияは、<選択肢の一つとして> (②) 女子大は必要ではないかというものである。

#### S先生：女子大の意義は「選択肢」

現代的な意義は選択肢かな。多様性イコール、何か選択肢があることやと思うから、やっぱりね、多様性の時代とか、男女どうのこうのいわれてるけれども、女子大っていう選択肢が世の中にあってもいいんじゃないかなっていう。

#### A先生：選択肢としてあっていい

選択肢としてあっていいのかなとは思っています。女子大学に行って、4年間なりプラスアルファなり、そこで学んで、ゆくゆく仕事に就く、あるいは何らかの形で社会に出たときには、女子だけじゃない環境になるというか。なので、ある種、限られた期間、特殊な環境で学ぶっていう状況にはなと思うんですけど、それはある意味、視野を狭めてしまったり、体験が限られてしまうっていうところもあるかもしれないんですけど。そうした環境でしか得られない体験とか、そこでしかできない体験とかもあるだろうし。実は、視野が狭まるようで、そこで広がるものもあるんじゃないかなと思うので。女子大学で学びたいっていう、思う人がいるんだったら、その環境を何らかの形で維持し続けるっていうのは大事なんじゃないかな、必要なことなんじゃないかなとは思っています。

S先生の意見が、その典型的なものである。「多様性イコール選択肢があること」というその発言の趣旨は、高等教育機関の多様性を重視するものである。同様に「選択肢」という語を使うA先生は、そのニーズ（女子大学で学びたいと思う人がいる）があるかぎり、「その環境を維持し続けるのが大事」と主張する。この見方は、次の第三の категорияにつながる。

それは、<女子大だから来たという学生の存在> (③) を強調するものである。この categoria には、全体で2番目に多い8つのステートメントが集まった。次のH先生の証言は、この categoria を代表する意見である。

#### H先生：相談に来る学生のために共学化には絶対反対!

僕として学生の相談を受けることが多いので、聞いていて。そういう子たちの、うちは最後の居場所なんで、共学化はしない!

いい言葉だなと思ったんですけど、学生の感想に「この大学に来て、初めて人間として教育を受けられることができた」っていうふうに書いていて。どういうことなのかと言いますと、やっぱり女の子たちって、小中高と共学の中でいくと、女の子の役を演じさせられて、もしくは対男性、異性を意識しながら教育現場にいなければならないっていうのがつらくて仕方なかったけれども、全然そういうことを一切考えずに、本当に自分の素のまま大学で教育を受けることができるって、こんな楽なことはない、本当にこんなことがあったんだっていうことを女子大に来て初めて分かったっていうことを書いてる子は、何人もいて。僕は本当にそのとおりであったというふうに思います。だから女子大の現代的な意義はないので、共学化にすべきだっていうふうな声に対しては、そうしたいところは勝手にやればいいけども、少なくとも僕がいる、ここの大学で、そういう子た

ち、学生たちがいるのを知ってる限りは、絶対反対するっていうふうに思ってますね。

カウンセラーとして学生相談を担当するH先生は、女子大学は一群の女子学生にとっての「最後の居場所」であり、「共学化はしない」と強く主張する。「本当に素のままに教育を受けることができる」という女子学生たちの意見が印象的である。

#### P先生：後ろに下がっていただろう女子がたどり着いたところ

今来てる学生たちのことを思い浮かべると、やっぱり女子大でよかったんじゃないかなっていうのはあります。というのは、いろんな子がいますけど、やっぱり人の目を気にしないわけじゃないんですけど、生き生きとしてるなと思いますよね。普通にしたら、この地域は保守的な感じなので、後ろに下がっていただろう子たち。まあまあ、やらざるを得ないと言えるかもしれないし、まあ、自分で考えて動くようになるって言えるかもしれませんが。

で、私の授業で、いちおうジェンダーのこととかやったりもしたんですけど、男性が苦手ですなどと書いてくれる人もいましたし。そういう子たちが大学っていう場までたどり着くっていうのには、まだ役割を果たしてるんじゃないかなって思いますね。場所による、地域によるだろうなと思うんですけど。まあいっぱいはいらないかもしれないけど、一つぐらいあってもいいんじゃないかとは思うんですけど。

上記のP先生の言葉は、それとは別の側面を言い表している。すなわち、地域性もあり、「後ろに下がっていただろう」女子たちを受け入れる役割が、P先生が勤務する女子大学にはあるという見解である。

続く、第四の категорияーは、女子だけで学べる環境(④)を推す意見である。上記の第三の categoriaーが「女子だけ」という場(=器)のあり方に重点を置いているのに対して、こちらは「その場で何が行われるか」(=器に何が盛られるか)に言及しているものである。最大の11個のステートメントをこの categoriaーに位置づけることができた。典型的な意見が、次のF先生のものである。

#### F先生：女性であることを意識しないで学べる環境

現代的な意義は、難しいですね、女性であるっていうことを意識しないで学べる環境っていうことですかね。女性だから何々できないとか、そういうことを考える必要がない環境の中で学べるっていう。そこでつけた力を社会で発揮して、そういう社会をつくっていける人たちを育てるっていう方向性ですかね。

F先生が指摘するのが、「女性であることを意識しないで学べる環境」で(さまざまな)力を(身)につけることができるという事実である。「安心安全な環境」のなかで「リーダーシップ」や「格差社会を生き抜く力」や「一生懸命磨いた個性」を育むことができると教員たちは考えている。次に掲げた文学部教員のI先生は、「シスターフッド」という独自の言葉で女子大学での教育プロセスのユニークさについて言及している。

#### I先生：シスターフッドの実現

あとはロールモデルを見つけやすいです。平たくいいますと、先輩がどうであったか、どういう

ところに就職をしたのか、どういう卒業論文を書いたのか。これもきちんとリサーチをしてるわけではないですけども、女の子としての悩みとかも、多分あると思うんです。いろんな意味で。そういうのも、先輩が私はいこうやって乗り越えたよみたいな、そういうシスターフッドっていうんですかね。それが一応、実現できるっていう、それは意義があるんだろうというふうに思っていますね。結局、共学だとシスターフッドは多分、成立しにくいだろうと私は思っていました。

たった1年2年ぐらいでいいんですよね。浪人して入ってきたとか、社会人経験のある女性が教室にいるっていう場面とか、もうそれだけでも随分違いますよね。そう考えると、教員には相談できない、あるいは事務局の人にもいろいろ相談できない、あとはカウンセラーとかにも相談できないようなことなんかも、相談できるんですよ。それが女の子としての、言い方がよくないんですけども、10代、20代前半のっていう意味で私は女の子って使っているんですが、そういう人たちの悩みとかもちゃんと聞いてくれる、答えてくれる。そういうのが大きいなと思って。多分、共学では、クラブの先輩後輩くらいにはいいのかもしれないですけども、もうちょっとオフィシャルの形にいるっていうのは大きいかな。僕はそう思っていますね。

最後のカテゴリーは、<女性のエンパワメント> (⑤) というものである。

#### G先生：マイノリティーとしての女性をエンパワメント

ジェンダー格差の是正っていうようなことをテーマにすることによって、マイノリティーとしての女性のエンパワメントに焦点を絞ってやっていける。もしかしたら。それは別に共学でもできるかもしれないんですけど、一応女子大ではそれがやりやすいという面はあるかなとは思っています。それも、どんどん減ってきてるから、逆に希少価値も出てくるのかなという。まさにアフーマティブ・アクションって言っていましたから、学長が。はい。そこをまたあえて言っていくみたいな感じかな。

#### U先生：女子を育てる意味はまだある

女子大がなくなっていくのは、女子にとってはあるべき姿なんでしょうね。男子にしか学びの場がなかったから、女子大ができたんでしょう。女子大がなくなっていくっていうのはいいんだけどね。女性も同等に学べていけるっていうのはいいんだけど。理想はそうだけど、現在女子を育てる意味はまだあると。本来はなくなって全然いいんだけど、でも現状はみんなが私はいって強い女性じゃないからね、実際は社会の中でまたそういう女子はいるからね。そこをバックアップするための場所。意味はすごくある。

まだまだやっぱり女子自身、学生自身がそれこそずっと働こうなんて思っていない人たち。働けるとも、働こうと思ってなかったりとか、この一歩を出せない人たち。女性ってそういう扱われ方でそれでいいと思ってる人たちもまだまだいて、そういうのを下支えするというか、まだそういう需要が世の中にはあると思うし。それがなくなるのは理想だけどなくなることはないだろうなとも思うし。

G先生の言葉に、このカテゴリーの中身は言い尽くされている。端的に、マイノリティーとしての女性をエンパワーできるのが女子大学の意義である、という指摘である。U先生の言葉は、それをより細かくくだいた表現であると言うことができよう。「働けるとも、働こうとも思っていないかったり」

する女性を「下支えする」のが女子大学という場所であると、先生は捉えている。

### (3) 否定的な意見

次に、否定的な意見の方を見ておくことにしよう。

分析の結果見出されたカテゴリーは、<歴史的使命は終わった><男子にも門戸開放を><男女をどう分ける?><女子大でなくても><積極的な意義を見いだせない>の5つである。それぞれについて、典型的な意見を一つずつあげておく。

<歴史的使命は終わった>

Q 先生：女子の大学進学率の高まり

女子大の意義あるのだから、自分でもそう思うってしまうことがよくあるんですけどね。女子の大学進学率も、かなり高くなってきていますし、そういう意味では女子大にこだわる意義っていうのは本当にあるのかなってのは、正直思ったりはします。はい。

<男子にも門戸開放を>

F 先生：保育職を男子に開く

職業の男女の区別っていうのをなくすっていう意味で言うと、例えば、私は保育士っていうのは、絶対、すごい大事な仕事だと思っているんですけど、男性の人が選べないっていうのは、やっぱりおかしいと思いますし、そういう意味で言うと、共学化していく方向性は悪くないなと。手に職系が女性だけじゃなくって、開かれていくのはいいことだろうなっていうふうには思います。

<男女をどう分ける?>

Q 先生：性的マイノリティーの視点から

性的マイノリティーの人たちのことをね、いろいろ言われたりしていますしね。だから、どこまでが女子なのかとか、いろいろ考えたりすると。どこまでが男子なのか、いろんなことを考える、そういうところからも、なかなか女子大っていうのは難しいのかなと、個人的には思ったりはします。

<女子大でなくても>

R 先生：女子大である必要性は小さくなってきている

今、義務教育から高等教育まで機会は男女平等にあるわけで、もし望むなら仕事で社会で活躍するための知識とか技能とか学びを得るのは、女子大じゃなくとも得られるはずですね。共学大学に行ったら得られるはずなので、女子大じゃなきゃいけないっていう必要性は小さくなってきてると私は思ってます。

<積極的な意義を見いだせない>

W 先生：積極的な意義は見えない

いろいろバリエーションがあって多様性を認めるところで女子大というのがあってもいいだろうとは思いますが、積極的な意義というのは正直なところ、個人のレベルで言えば見出せない。

地方で経営のために共学化した経験をして、共学にして成功したっていうところだと思うんですけど、何の弊害も感じないというか、共学化したことによってメリットのほうが多かったらうと思っているので、女子大の積極的な意義っていうのはちょっと私からは見えないというのが正直なところです。

要約すると、以下のようになるだろう。第一に、歴史的に女子に高等教育を開くという意味でつくられたのが女子大学であり、女子の進学率が高まった今日ではもはやその歴史は終わった。第二に、もともと女子に特化した職業分野もあったが、もはやそれは時代遅れであり、当然男子にも開放すべきである。第三に、そもそも男女を峻別する見方の正当性が揺らいでおり、実質的にも女子大学に誰が入れるかを決定するのは、生物学的にも社会的にも困難になってきている。第四に、社会で活躍するために必要な知識・技能は共学大学でも当然獲得可能であり、女子大学で教育する必然性はないといえる。そして第五に、(共学化に移行した元女子大学勤務の、ある教員の視点からすると) 共学化は成功裡に終わったため、女子大学であることの積極的意義はもはや見いだせない。

### 3. 卒業生の意見分布

#### (1) 全体的な傾向

次に、卒業生 15 名の聞き取りにみられる「女子大学の現代的意義」についての意見を、教員の場合と同様の手続きで整理してみた。抽出されたステートメントの数は全体で 34 個である。個人別にみると、0～4 個という分布となった。

卒業生は、そのすべてが各大学で聞き取りを行った教員から紹介してもらった女性たちである。そこから予想されるように、彼らのコメントのほぼすべてが女子大学の存在に肯定的なものであった(否定的なものは実質的に皆無であった)。

その内容を整理したものが、次頁の表 4 である。教員に対するものと同様の方法でカテゴリーをつくと、それらはすべて表 3 にあらわれたカテゴリーの内部に結果的にはまりこむものとなった。すなわち、表 3 における教員の肯定的な意見と二重写しとなるカテゴリー群が析出されたのである。つまり、卒業生たちが感じる女子大学の意義は、教員たちが想定しているそれと内容的にはほぼ重なりあうことが確認された。

#### (2) 肯定的な意見の分布

教員のカテゴリー①と②に相当する意見は、それぞれ 1 つずつ見出された。

以下のようなものである。

教師カテゴリー<女子大ならではの文化・価値> (①) に入るもの

f さん：学問としていろんなことを学ばせていただいた

直接的にはそうなるかと思いますが、やはりうちの大学では、社会学もそうですし、心理学も、本当にそれぞれ臨床的なことじゃなく、学問としていろんなことを学ばせていただきました。なので、いろいろな目で、子どもたちのことや教育全体のこと、制度のことや、今の日本の教育が向かおうとしているところとか、まだまだ勉強ですけど、そういうことを考えながら実践できるのは、うちの女子大にいたからかなというところが強いかなとは思いますが。

表4 女子大学の教育に対する卒業生の評価

肯定的な意見		
①<女子大ならではの文化・価値>		1
②<選択肢の一つとして>		1
③	トータルで	10
③-1<男子が苦手な人に>		4
③-2<男子がいない環境で学ぶ>		6
④	トータルで	11
④-1<安心して学べる>		3
④-2<コミュカつけた>		4
④-3<今もつながるあたたかい人間関係>		5
⑤	トータルで	6
⑤-1<見えない壁をこえる>		3
⑤-2<キャリア志向>		3
⑥<その他>		4
	合計	34

教師カテゴリー<選択肢の一つとして> (②) に入るもの

iさん：いろいろな形があって、自分の行きたいところを選ぶのがよい

大学を選ぶのって、人生の中で結構大きなイベントだと思うので。女子大だから選んだっていう人もすごくいっぱいいると思うので。わざわざ全部共学にしてしまうのも、それもちょっと違うんじゃないかと思ったりします。いろいろな形があって、その中から自分の行きたい所を選ぶっていうのでいいんじゃないかなと。全部、同じようにしましたよ、じゃあ、こっからどうぞってなるよりは、いろいろな形があって、いろいろな特色があって、その中で自分がどう過ごしたいかな4年間って考えて、その中で女子大を選ぶとか、共学を選ぶとかっていうのがいいんじゃないかなと思ってます。

①のfさんは、教員の項でみたB先生が勤務する名門女子大学の卒業生である。彼女は、学部段階で「学問としていろんなことを学ばせていただいた」と母校での経験を述懐している。②のiさんは、教員になりたいということで自らの郷里を離れ、ある女子大学に入学した卒業生である。彼女の見方は「いろいろな形があって、その中で自分の行きたいところを選ぶ」のがベストだというものである。

教師カテゴリーの③④⑤については、卒業生たちの意見は、それぞれ複数のサブカテゴリーに分類して把握することができた。順に見ていこう。

教師カテゴリー<女子大だから来たという学生の存在> (③) に入るもの

これは、③-1<男子が苦手な人に>と③-2<男子がいない環境に学ぶ>という2つのサブカテゴリーに分けることができる。それぞれの代表的意見をあげておこう。

③-1<男子が苦手な人に>

cさん：男性が苦手な人のために女子大は維持すべき

男性が苦手っていう人もいないじゃないですか。そういう子とかいてたら、ちょっとでもいいから

残しといてあげたほうが、その子たちの逃げ道じゃないけど、行きやすい場所があったらいいんじゃない。全部が全部共学ってなったら、特色というか差が、いろんな大学と比べてもなくなりそうやから、ちょっとぐらいは置いといたらいいのになとは思いますが。

### ③-2 <男子がいない環境に学ぶ>

#### aさん：周りの目を気にせず動ける

それこそ男性を気にせず、自分たちのやりたいように全部動いて、周りの目を気にせずに動けるっていうのは女子大ならではのかなっていうのは。

教師カテゴリー<女子だけで学べる環境> (④)に入るもの。

これには、もっとも多い12のステートメントを入れ込むことができた。④-1<安心して学べる>、④-2<コミュ力をつけた>、④-3<今もつながるあたたかい人間関係>という3つのサブカテゴリーに分けて捉えることが可能である。それぞれの代表的意見をあげておこう。

### ④-1 <安心して学べる>

#### jさん：女子だけで学ぶ4年間のかけがえのない経験

社会に出ると女性だけっていう環境っていうのはそうないんじゃないかなと思うんですよ。職業的に保育士とかは女性が多い仕事ですけど。本当に女子だけで学ぶ、同じ教室にずっといて4年間一緒に、2年間一緒にっていうのはあまりない環境かなと思っているんです。特殊かなとも思うけど、そこだからこそ学べることとか経験できることもあるのかなと私は思っているんで、そういう意味でも意義はあるのかな。女子大だからこそその授業とかカリキュラムというのを置いている大学さんもあると思うので、そういうのを学ぶというのもいい時間だなというふうに思っております。

### ④-2 <コミュ力をつけた>

#### cさん：人前で自分の考えを話すことへの苦手意識の克服

私的には、高校生のときから、人前が出るっていうのとか、ハキハキ自分の考えを伝えるっていうのがすごく苦手で、でも教員になりたいっていうのは思ってたんですけど。女子やから同じ性別やし、そんな大きい人数でもないから、前に出て発表とかする授業が結構あったから、そこでいっぱい練習とかさせてもらって。自分の思いを伝えるとか、前に出るとか。人の思ってることとか、自分がどう思われてんねやろ、そういうのは結構克服できるようにこの大学でなったかなとは思っています。男子がいたら、人目というか気になって、思ったことあんま言えないかなって。自分をオープンにさらけ出せなかったかもしれないなってのはありますね。

### ④-3 <今もつながるあたたかい人間関係>

#### lさん：先生との近さ

私はこの女子大しか行ってないんで、その他の大学のことは分からないけど、先生との近さというか、まあそこが一番あれかな。親身にというか。私もめちゃめちゃ真面目やったかって言ったらそうではないんですけど、卒業してからも交流というか、大学の講義に出させてもらったりとかもしてるんで、つながりはすごい深いかなっていうのがあります。私も、女子大がいいからって言って別に入ったわけではないんですけど、それでよかったかなっていうのはありますね。

教師カテゴリー<女性のエンパワメント> (⑤) に入るもの

これは、⑤-1<見えない壁をこえる>、⑤-2<キャリア志向>という2つのサブカテゴリーに分けて捉えることが可能である。それぞれの代表的意見をあげておこう。

#### ⑤-1<見えない壁をこえる>

Hさん：女子大での学びで社会の見えない壁をこえる

それこそ、多様性の中で女子大だけ前時代に特化しちゃってるっていうのは、違うのかなって思われる気持ちもすごい分かるんですけど。でも実際、自分が社会に出てみて、いくら多様性だ、男女の差がないって言っても、見えない壁ってあるんですよ。女性が低く見られてるなとか、女性だから変に特別扱いされてる気がするとか、そういうのを感じることがあって。

そうなったときに、女子大だからこそその教育だったり環境で学べたことっていうのが、自分の気づかない中でプラスになるんじゃないかなって思っていて。それこそ私が、女子大だからこそなんですかね、大学で身につけたいろいろなことっていうのが、結局、今、男性もいる社会に飛び込んだときに、たくましく。なので、時代の流れとかもあると思うんですけど、なるべくであれば女子大ってものは残していてもいいんじゃないかなとは思っています。

#### ⑤-2<キャリア志向>

aさん：お茶くみ志向からキャリアウーマン志望へ

家に入っているのは全く考えてないですし、結婚するときも相手に「もし今後、子どもができて、どうのこうのみたいなふうに進んだとしても、私は専業主婦になるつもりはないよ」っていうのは宣言してからですし、社会と関わりを持ってたいっていう気持ちはありますね。いや、高校のときは、私ずっとお茶くみの仕事をしたいって言ってて。

この項全体の分析結果をまとめると、以下のようなになる。まず、教師カテゴリー①<女子大ならではの文化・価値>と②<選択肢の一つとして>については、少数だが教員の意見に共鳴するような言明を見出すことができた。次に、教師カテゴリー③<女子大だから来たという学生の存在>については、<男子が苦手な人に>と<男子がいない環境で学ぶ>という2つの水準で女子大学の意義を主張する卒業生の存在を確認することができた。さらに、教師カテゴリー④<女子大だけで学べる環境>に関しては、最も多くの支持が集まり、<安心して学べる><コミュ力をつける><今もつながるあたたかい人間関係>という3つのサブカテゴリーを導き出すことができた。最後に、教師カテゴリー⑤<女性のエンパワメント>については、<見えない壁をこえる>と<キャリア志向>という2つのキーワードが浮かび上がってきた。

## 4. まとめ

ここでの分析をふまえて私たちが主張したいのは、日本の高等教育の「多様性を保障するひとつの学校種として女子大学がある」という、その存在意義である。多くの関係者が言及していたように、そこを選びたい、そこで学びたいという人々が存在するかぎり、基本的に女子大は維持存続すべきだ、と私たちは考える。

ただし、生き残りに向けての道のりは長く、険しい。Ⅲ節で指摘したように、存続に向けてブランディングに余念がないいくつかの有力女子大学がある一方で、生き残りをかけての自校なりのポジ

ショニングを模索し続けなければならないいくつかの小・中規模女子大学も存在している。

全体の流れとして、女子大学の生存競争の激化がある。勝ち組と負け組に分かれる現状が、明確になりつつある。教育社会学的な観点から忘れてはならないのは、そうした状況のなかで、女子大学を受け皿としていた一群の女子たちの高等教育進学機会が奪われつつある、という事実である。

女子大学の岐路は、日本の高等教育全体の分かれ道でもある。今後もその行方を注視していきたい。

## 引用文献

安東由則・鎮朋子 2008, 「女子大学の自己像－大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から」、『武庫川女子大学教育研究所 研究レポート』38, 121-158.

安東由則 2022, 「アメリカ・日本・韓国における女子大学の動向と特性比較」、『実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報』8, 37-55.

Goffman, E. 著・中河伸俊他訳 2023, 『日常生活における自己呈示』ちくま学芸文庫。

志水宏吉・新谷龍太郎・岡邑衛・金南咲季 2024, 「女子大の自己呈示－大学パンフレットの質の分析から－」『武庫川女子大学教育総合研究所 研究レポート』55, 19-55.

## 【執筆担当】

I・IIを新谷、IIIを岡邑、IVを志水が執筆した。

## 【謝辞】

各大学の基礎情報に関しては武庫川女子大学教育総合研究所・安東由則教授が集計したデータ（「女子大学統計・大学基礎統計」<https://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>）を一部参考にした。ここに記して謝意を表します。

# Women's Universities at a Crossroads: Realities Revealed through Institutional Brochures and Stakeholder Narratives

SHIMIZU Kokichi<sup>1)</sup>, SHINTANI Ryutaro<sup>2)</sup>, OKAMURA Ei<sup>3)</sup>

## Abstract :

This study examines the current realities and contemporary significance of women's universities in Japan, which now face rapid transitions toward coeducation and program closures. Following their postwar establishment in 1948, the number of women's universities steadily increased, peaking at 98 institutions in 1998, before declining to 74 in 2024. Focusing on institutional "survival strategies," we conducted a qualitative analysis of admission brochures from 72 women's universities nationwide, along with interviews involving 57 faculty members, students, and alumnae from 11 institutions.

The analysis identified three types of institutional self-presentation—"innovative," "moderate," and "conservative"—each shaped by constraints such as institutional scale, location, and historical background. Interview data showed that faculty members' positive evaluations outnumbered negative ones, and alumnae likewise expressed strong appreciation for the educational environment provided by women's universities. Across institutions, respondents consistently emphasized the value of an environment that enables women to maintain a sense of authenticity and learn without the pressures of the male gaze. These findings underscore the role of women's universities as an important institutional form that sustains diversity in Japanese higher education, while also highlighting the challenges they face in ensuring future viability.

**Key Words :** Women's universities, Survival strategies, Institutional self-presentation,  
Diversity in higher education

- 1) Research Institute for Education at Mukogawa Women's University, Professor 2) Faculty of Contemporary Social Studies at Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate Professor  
3) Center for Education in General Studies at Konan University, Associate Professor